



眞砂秀朗／写真・文

絵本、イラストレーション、CD制作など、絵と音の相互性のなかで創作しているアーティスト、プロデューサー。昨年、ニューメキシコ、アリゾナの砂漠地帯に旅をする。アナサジの遺跡のあるチャコキャニオンはニューメキシコ州にあり、その近くにはネイティブ・アメリカンの居住区もある。

岩の響きのなかで、 風の音のなかで

アルバカーキーの空港から車でしばらく走ると、褐色の岩の世界が広がっている。アメリカ・インディアン以前に、この地に居たアナサジと呼ばれる人々の、数えきれないほどの遺跡が散在している。この地域は、いわゆるニューエイジのメッカでもある。地表に現われた巨大な岩の建造物を前にすると、アメリカという名前は単に現代人の言葉でしかないと思ってしまう。

人間は岩のなかで暮らしていた。岩に寄りそうように、岩と共に。石器時代と一言ではあまりにも長い。宇宙空間の時の流れ。岩の響きのなかで、言葉を覚える前の幼児が母親に抱かれるように、岩山に抱かれていた人たち。植物のようにバイブレーションを肌で感じ、季節のなかに時間がある。

チャコキャニオンの夕日は視界の全てが褐色からオレンジ色に輝くときだ。風の音をこんなに意識したのは初めてだ。他に全く音がないから、あるのは岩の響きだけ。風が耳元で鳴っているようでもあるし、遠くで鳴っているようでもある。

ペトログラフと呼ばれる絵文字。地球各地の岩に彫られた絵に共通性があり、確かな意味があることが判明してきたという。今のこの文明が始まる前、地球の各地に、岩という共通の場で、同じ響きのなかに暮らしていた人間。

日が沈み、冷たく透きとおった空にシルエットになったキャニオンを見ているとそれは、ニューエイジというカオスの海に浮上してきた新大陸のように思えてきた。